

19世紀イギリスの公立博物館の成立について

金山, 喜昭

(出版者 / Publisher)

法政大学資格課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学資格課程年報

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026176>

19 世紀イギリスの公立博物館の成立について

法政大学キャリアデザイン学部教授 金山喜昭

はじめに

イギリスでは大英博物館が 1759 年に開館して以降、各地で博物館が設立されるようになった。当時、サー・アシュトン・リヴァーやウィリアム・ビュロックのように興行的な性格をもつ見世物的な博物館も登場したが、18 世紀後半になると、各地に文化・学術団体が結成され、それらの中にはコレクションを形成して博物館を設立したところもあった。その後、文化・学術団体の博物館は、地元の自治体が引き継ぎ公立博物館になったところが少なくない^{註1}。矢島國雄は、公立博物館の設立について、「1845 年の博物館法と、1851 年の第 1 回万国博覧会の成功は、疑いなく英国各地に博物館を開設させる、より強力なインパクトとなった」と指摘する^{註2}。

その背景にあったのは、スーザン・ピアースが指摘するように、博物館法の制定は当時の国法の集成整備の一環であったことや、産業革命後の近代社会において博物館も「無法な大衆を、ビクトリア朝社会の望んだ穏当で、責任ある、行儀のいい市民へと変えていく役割を担うもの」であったことであるとしている。また、万国博覧会の後にサウスケンジントン博物館の設立準備を主導したヘンリー・コールが主張するように、産業界に科学や芸術を応用できることを周知させること、大衆娯楽を開拓することに、博物館を向かわせる意図のあったこともあげられている^{註3}。

本稿は、19 世紀に設立されたイギリスの公立博物館を対象に、自館の成り立ちに関する展示の知見と関連資料をもとに、公立博物館の成り立ちや、その事情について考察する。

1. 調査事例

(1) カンタベリー博物館・図書館・アートギャラリー

カンタベリー哲学・文学協会は、1825 年に博物館を設立した。その後、1847 年から地元自治体が運営を始め、1899 年、現在のカンタベリー市の博物館・図書館・アートギャラリーの建物が完成した。地元出身の医師ジェームズ・ビーニーの死後、市に遺贈されたものが、同館を再建する資金にあてられたものである^{註4}。

同館には、館史の年表や、カンタベリー哲学・文学協会員で博物館創設時のメンバーであったウィリアム・ゴールデン、寄付者のジェームズ・ビーニーに関する解説、19 世紀に収集した博物学標本などが展示される（写真 1・2）。また、19 世紀の同館にはカンタベリーにゆかりの宣教師、行政官、外交官、探検家などから世界中の文物がもたらされたことを示す展示もある。解説文には、「英国が地球の果てまで探検し、調査し、略奪した、過ぎ去った時代のスナップショットです。カンタベリー哲学・文学協会博物館のために多くのものが集められました」とある。

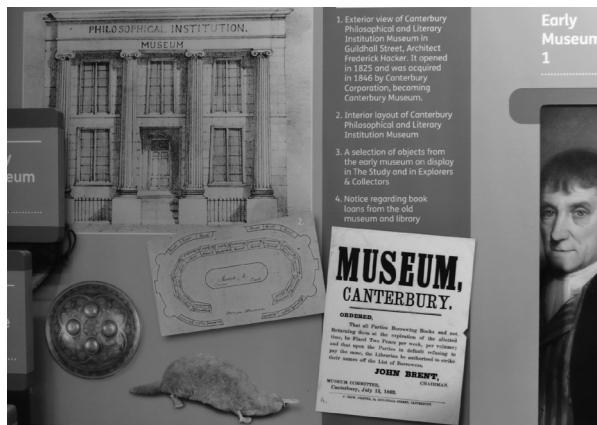


写真 1 創設期のカンタベリー哲学・文学協会博物館、1825 年（展示パネルより）2017 年 7 月撮影

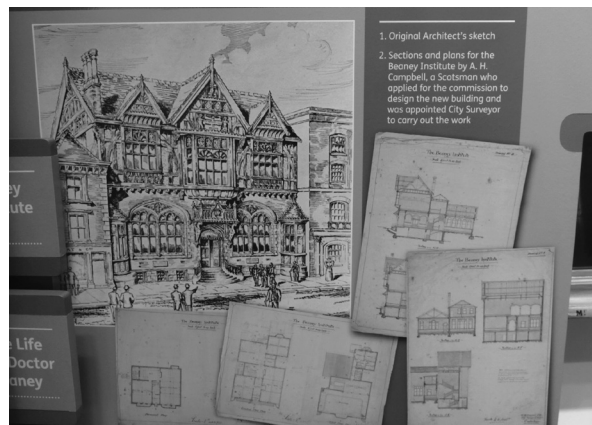


写真 2 新博物館の外観図とプラン、1899 年（展示パネルより）2017 年 7 月撮影

(2) ドーバー市博物館

同館は、1836年にドーバー博物館・哲学協会によって設立された。協会は、「博物館、図書館、読書室、会話とクラスによる文学と科学の知識」を促進することを目的とした。

同協会の博物館は、旧市庁舎の建物（オールド・ギルドホール）を使用し、当初は会員のみに開放されていた。1837年12月の「ドーバー電報」によれば、「博物館は毎週月曜日にすべての階層の人たちに無料で開放されます。ボクシング・デー（休日）に始まり、5日間で1,500人が参加しました。会場は非常に混雑したが展示品の損傷はなく、すべての人が署名簿に署名することはできませんでした」というように、翌年には一般に開放されたことがわかる。博物館への寄贈品は、博物学の標本がほとんどであったというが、E.P. トンプソン市長から420羽の鳥類の標本などが寄贈された。それは、後に同館が博物学コレクションを形成する契機となった。

その後、博物館は収蔵・展示スペースを拡大する必要に迫られ、新しく施設が必要となった。1845年、博物館法が制定されると、自治体が資金を調達することができるようになり、市は新しく博物館とマーケットホールを建設した（写真3）。

1849年、同協会は博物館のコレクションを市に移管した。市はジョン・フレンドを名誉キュレーターに任命した。1849年1月に再開した博物館には、講座室、図書室、展示室が設けられ、階下にはマーケットがあった。博物館は町の中心地に位置し、施設や設備は以前よりも良くなった。コレクションの内訳は、脊椎動物標本470点、無脊椎動物標本1,070点、化石標本50点、鉱物標本180点、民族資料などであった。

同館では1836年から1860年に講演会が定期的に開催された。1851年3月25日、モットリーによる「電灯」と題した講演会では、強力なバッテリーを使った様々な実験が行われた。同年の「朝食の科学」という講義では、水、お茶、コーヒー、ココア、砂糖についての科学的な説明が行われた。ソワレ、自然散策、

討論会なども開催された。同年5月13日、マーマリーによる「海の自然史」という講演会では、労働者階級の人たちが参加できるように火曜日の夜間に開催した^{註5}（写真4）。

(3) イプスウィッチ博物館

1847年、ノーウィッチの司教エドワード・スタンリー博士がパトロンとなり博物館は開館した。リンネ協会の元フェローである昆虫学者ウィリアム・カービーが初代理事長になり、1853年まで運営された。博物館は労働者階級に博物学を教育（普及）するために始められたことから、彼らが利用しやすくするために夜間に開館した^{註6}。

この事業は、地元のクエーカー教徒であったランサム家のジョージ・ランサムが資金を援助した。彼が経営するランサム・エンジニアリング産業は、19世紀初頭にイプスウィッチの産業を発展させることに貢献した。同館は60人を超える当時一流の科学者が名誉会員や副館長として名を連ねた。キュレーターには、ウィリアム・バーナード・クラーク博士に次いで、1850年にはデイビッド・ウースターが着任した。理事長はカービーに次いで、同年にケンブリッジ大学でチャールズ・ダーウィンの指導者であった植物学者、地質学者のジョン・ステューブンス・ヘンズローが着任した^{註7}。

同館では、ダーウィンの著書「種の起源」（1859）が出版される数年前に、博物学の展示が行われた。多くの名誉会員のなかでもウィリアム・ジャクソン・フッカー、ウィリアム・ヤレル、ウィリアム・バ克蘭ドなどは「種の起源」をめぐる議論の中心にいた人たちであった。

1852年、博物館は財政破綻の危機に見舞われたが、1850年の公共図書館・博物館法の規定により、博物館（図書館は博物館に付設されていた）を支援するために納税者による投票が行われた。その結果、コレクションと資産は正式に公社に譲渡され、元の場所で博物館を維持することになった。博物館は再び新たな管

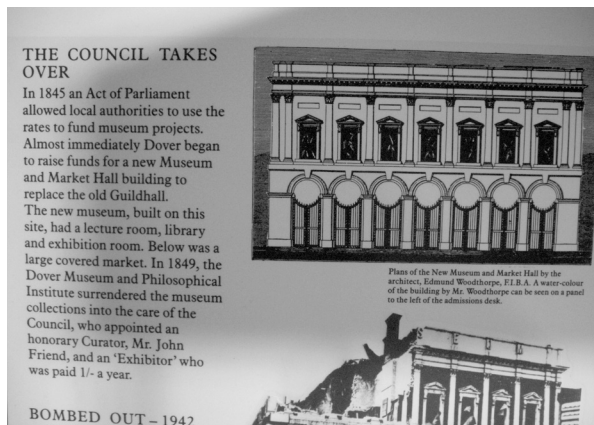


写真3 新博物館とマーケットホールのプラン図（展示パネルより）2008年6月撮影

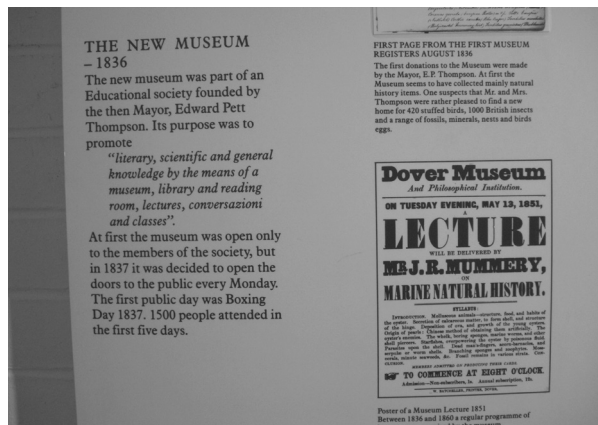


写真4 博物館の講演会ポスター（展示パネルより）2008年6月撮影

理下で運営されることになり、ヘンズローは引き続き理事長にとどまることになった。

その後も同館はコレクションを積極的に収集し続けた。1853年にキュレーターになったジョージ・ナイツは、1872年に亡くなるまでコレクションの形成に貢献した。その後、キュレーターは、植物学者、地質学者のジョン・エラー・テイラー博士に引き継がれた^{註8}。

テイラーは、1872年から1893年まで定期的に講義を行い、最大500人の聴衆に講義をしたこともある。労働者階級は無料とした。1885年にはオーストラリアのレクチャーツアーを行ったり、「海辺での30分」、「グリーンレーンでの30分」、「植物の賢さと道徳」など、大衆向けの人気のある本も出版した^{註9}。

1881年に建てられた新館（現博物館）の「ビクトリア朝の自然史ギャラリー」（写真5）は、次のように紹介されている。

動物は、最も単純な無脊椎動物から最も進んだ哺乳類である類人猿まで、動物界の多様性を説明するために配置されました。イプスウィッチ博物館の理事長であり、ケンブリッジ大学のチャールズ・ダーウィンのチューターである、J.S. ヘンズロー牧師は、この展示配置に個人的な関心を持っていました。1859年に出版された「種の起源」で説明されているダーウィンの進化論は、展示配置に新しい議論を与え、創造に対する文字通りの信念に挑戦しました。博物館は科学の最前線にあり、関心のある一般の人々に情報を提供していました。このギャラリーの展示品には博物館の設立当時のものがあり、19世紀の典型的な展示を表しています。

イプスウィッチ博物館では、当時、ダーウィン進化論が博物館の展示に採用されていたことが知られる。種の起源の論争は、ダーウィンによる発表後、すぐに決着がつくものではなかった。学会内の意見の対立や、教会勢力からの批判などもあり、決着までには歳月を要した。ギャラリーが完成した当時は、ようやく世の

中が進化論を受容するようになっていた頃であった。

同館の博物誌の展示は分類展示のほかに、生態展示が登場していた。中でも19世紀末から20世紀初頭にかけて制作された数多くの鳥類の生態展示が特筆される（写真6）。大形の「岩場の海鳥のジオラマ展示」（写真7）は、解説パネルによれば、「すべての標本は1902年に現地で採集され、イプスウィッチに運ばれて製作された。製作には写真や絵具を用いて、52匹の鳥標本と多くの卵、実物の海藻、岩、大きな石膏の岩を配置した。岩の表面は大英博物館のロバート・ホルの手による。岩の着色や設置は当館のキュレーターのフランク・ウールノーウによって行われた」とされる。1880年代中葉には、動物の動きを撮影することが可能となり、90年代中葉までにはフィルム、フラッシュ、望遠レンズが発明されて写真技術は一挙に拡大した^{註10}。同館のキュレーターは、そうした技術をいち早く取り入れて、生態展示の製作に応用したのと考えられる。

「エコロジー」という言葉は、ダーウィンの進化論が公表された以降に生まれた。ダーウィンは、『種の起源』において種と種の相互関係や環境への種の依存を一貫して力説したことから、彼はエコロジーの先駆者とされる^{註11}。同館の生態展示は、「エコロジー」の考え方を反映させたものといえる。生態展示は、野外観察をすることにより生物界を学ぶとともに、その生息環境を守るために自然を保護する観念を呼び起こすものとなった。

(4) ブリストル市博物館

同館は、1823年のブリストル科学芸術振興協会の設立をもって起源とする。1871年4月に同協会はブリストル図書館協会と合併し、1872年4月に新たに博物館と図書館の複合施設が開館した。しかしながら、同協会はキュレーターのエドワード・ウィルソンに給料を支払うことができないほど財政難に陥っていた。そのため、協会は市と交渉して1894年5月、職員と施設、コレクションをブリストル市に譲渡することで合意した。



写真5 「ビクトリア朝の自然史ギャラリー」の展示（イプスウィッチ博物館）2008年9月撮影



写真6 1880年～1890年代の鳥類の生態展示（イプスウィッチ博物館）2008年9月撮影

1899年6月、市内のソールズベリー・クラブの土地が市に売りに出されたことから、ウィリアム・ヘンリー・ウィルズ卿から土地の購入と、そこに新しい博物館を建設するための資金として10,000ポンドが市に寄付された。フレデリック・ウィルズによって設計された新博物館は、1901年に準備が始まり、1905年2月に図書館・博物館とアートギャラリーの複合施設として開館した。

現在、同館に展示されるアッシリアのレリーフ（ニムルド出土）（写真8）は、ヘンリー・ローリンソンの手を経て同館にもたらされたものである。彼は、イギリス東インド会社の陸軍士官であり、アッシリア研究者として楔形文字の解読に多大な功績を残すなど、「アッシリア学の父」といわれた。大英博物館は、オースティン・ヘンリー・レヤード卿が手がけていたアッシリアやバビロンにおける発掘作業をローリンソンが継続できるように、ローリンソンに資金を提供した。バグダッドの英国総領事館員であったローリンソンは、大英博物館に多くのレリーフを送る一方、英国内の主要都市の団体や機関にも配布した。その一部がブリストルにもたらされた。展示解説文は、その経緯を次のように説明する。

ローリンソンはブリストルと強いつながりがありました。母親の妹は地元の人と結婚し、若いローリンソンは叔母と一緒に住んでブリストルのポコックの学校に通っていました。この初期のつながりが、おそらく the Bristol Academy for the Promotion of the Fine Arts（現在 the Royal West of England Academy）に4つのレリーフを送った理由です。

ローリンソンから送られたレリーフを所蔵していたアカデミーは、3つのレリーフ（4つのうち1つは大英博物館に所蔵される）を同館で保管、展示する方が妥当だろうと考えた。移管のための手続きは1905年に終了し、アカデミーにはレリーフの購入費として400ポンドが支払われた^{註12}。

近年、脱植民地化の動向とともに、旧宗主国から被

植民地の国々に文化財の原状復帰をすることが国家間の争点となっている。イギリス国内だけでも大英博物館をはじめ各地の博物館が、植民地から文化財を収集した。文化財問題を解決するためにはその構造を解き明かすことがまずは必要になる。同館の事例からは、当時、政府が考古学を研究する職業人（軍人、医師、外交官など）に文化財の調査や発掘品の移送を指示していたことや、大英博物館に引き取られた文化財は、ブリストルばかりでなく、各地の博物館に分配されたことを窺い知ることができる。

(5) リーズ市博物館

1819年、リーズ哲学・文学協会は地元の企業家、銀行家、医師、聖職者、学者、アーティストなどによって設立された。同協会は自然の知識や文学などについて議論する同好者の集いであった。宗教、政治、倫理の話題は議論の対象外とされた。1821年に建てられた「哲学ホール」には、メンバーたちが収集した博物学、地質学、考古学、民族誌などのコレクションが展示された。1838年にはメンバーの旅行や収集品からの寄付が殺到するにつれて、博物館のスペースを拡大する必要が生じた。キュレーターのヘンリー・デニーは、特に自然誌の研究に積極的に取り組み、チャールズ・ダーウィンやデビッド・リビングストンのような探検家からも海外の標本がもたらされた。収集品は分類され、ラベルを付け、展示、保存された。当初、博物館はメンバーのみに利用が許されていたが、1852年、利用者から1ペニーを徴収して公開したところ、入場者は8,000人以上にのぼった。若者のための科学に関する無料の講演会は、クリスマスの恒例行事となった。哲学ホールは、コレクションの増加により施設に収まりきらずに満杯であったことや、事業の拡大化のために、1862年に講義室、動物学ギャラリー、図書館などを備えた新しいものに建てかえられた。1921年、建物とコレクションはリーズ市に譲渡されてリーズ市博物館となった。なお、19世紀の同協会の理事長には、企業家、政治家、医師、聖職者、学者などが就



写真7 岩場の海鳥のジオラマ、1903年（イプスウィッチ博物館）2008年9月撮影

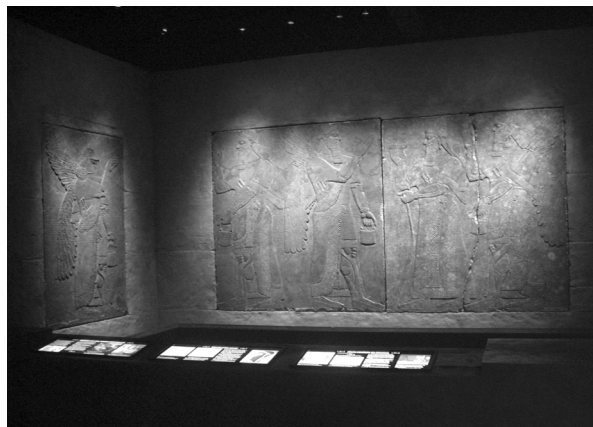


写真8 アッシリアのレリーフ（ニムルド出土）（ブリストル市博物館）2009年2月撮影

任した^{註13}。

同館の展示には、リーズ哲学・文学協会のメンバーが自宅で博物学を研究する様子が再現されている（写真9）。棚の上には、サンショウウオ、タイガーサラマンダー、セミエビ、ウミヘビ、カブトガニ、エボシガイが置かれている。書棚には貝類事典や、別の段には化石、片麻岩、蛍石、砂岩などもみられる。キャビネットの引き出しには蛾の標本が分類され整然と並べられている。机の上には、ロバート・チャンバーズの図鑑が開かれており、蝶標本の整理をしている様子が再現されている。この展示からは、会員のなかに博物学の徒がいたことや、博物館はそのような人たちによって支えられていたことを読み取ることができる。

2. 考察

(1) 文化・学術団体の性格

1887年、国立研究所と地方の絵画館以外の博物館は217館であった^{註14}。そのうち47館が地方税に依存（ウエールズとスコットランドは3館ずつ）、そのほか9館が市の基金の援助を受けていた。ここからは、本稿で取り上げた、カンタベリー、ドーバー、イプスウィッチ、ブリストル、リーズの公立博物館について若干の考察をする。

本稿で取り上げた博物館は、始まりはどれも地方の文化・学術団体という一つのコミュニティによって設立されたものである。それらは自己研鑽やメンバー間の親睦、相互の研鑽をはかるものであったが、次第にコレクションが形成されるようになると、集めたコレクションを公開するようになった。それらは知識の普及や知的交流の場となったばかりでなく、労働者階級の更生という意味合いも持っていた。従来のように一部の上流階級にとっての知から、社会を構成する中間層が厚くなることにより、知のあり方が変わり、新たな知を探究するための社会的装置の一つとして近代の博物館が登場するようになった。18世紀後半から19世紀に至るそうした動向には、どのような背景がある

のだろうか。

産業革命により、イギリスは世界で屈指の工業国として発展した。各地に登場した資本家には、国家の工業化の発展に必要とされる労働者を育成することが求められた。産業革命は、各地に都市化の波をもたらし、社会のあり方を大きく変えるものとなった。一方では、階級間の対立を引き起こし労働者の貧困を生み出すなど、それらは産業革命の負の遺産として大きな社会問題となった^{註15}。

国内各地が工業都市として発展し経済力を持つようになると、社会の中間層が厚くなり、様々な組織や団体等が生まれるようになった。その一つとして文化・学術団体のように進取の気質に富み、新しい知に対する興味関心をもつ人たちのコミュニティが登場したといえる。労働者階級の貧困問題は、彼らにとっても地域の治安を維持し、生産性を高めるために、その解決をはかることが課題となっていた。山本通によれば、聖職者や教会の慈善団体によっても、労働者階級の生活の規律化を促進するための運動が行われ、中流階級の中でも特に実業家の家族が担い手となって行われた「悪徳抑制協会」（1802年設立）は品行道德改善運動を展開したといわれる。その目的は大衆の祝祭行事や大衆的スポーツを禁圧するなどにより、貧しい労働者たちに勤勉、節約、節酒、自助に専念する小市民的な倫理を普及するものであった。節酒や禁酒の習慣は、「リスペクタビリティ」を「人間としての尊厳」と理解した労働者たちから歓迎され、禁欲的生活は、結果的に規律ある労働の基礎につながったといわれる^{註16}。イプスウィッチ博物館のパトロンであったノーウィッチの司教エドワード・スタンリー博士のように、博物館を設立した各地の文化・学術団体のメンバーには聖職者や慈善家が参加していることから、その様子を窺い知ることができる。

企業家の中には、飲酒による労働力の質の低下が、地域からの産業の流出をもたらし、海外との競争力が弱まることに危機感をもつようになった者もいた。勤勉や節儉をモットーとする質実な中産階級は自分達の生活態度を労働者階級にまで広げていくことを自らの使命であると考え、労働者に節酒などの道徳的改善を促すことに積極的な社会活動を展開した^{註17}。実際、イプスウィッチ博物館の運営は、地元のクエーカー教徒で企業家のランサム家のジョージ・ランサムがパトロンになっている。ブリストル科学芸術振興協会やリーズ哲学・文学協会のメンバーにも多数の企業家が名を連ねているのはそのためであったと思われる。

つまり、当時の文化・学術団体は、単なる趣味人の集まりではなく、社会的な使命をもっていた。博物館において、展示を鑑賞することは、風紀を正し行儀を身につけることになるし、動植物の標本を見学することや、講演会で新しい知識を得ることは労働者階級の



写真9 リーズ哲学・文学協会のメンバーの自宅の部屋の様子（リーズ市博物館）2009年3月撮影

人たちに知的好奇心を与えたといえよう。博物館は社会階層に区別されずに、個人の興味や関心に応じて、教育を受ける機会を提供した。ただし、労働者階級の中でも、産業革命にキャッチアップして職場で働く労働者には生活の質の向上が約束されていたが、そうでない場合は時代に取り残されて貧困状態から脱することができない人々もいた^{註18}。博物館が対象にした労働者階級の人とは、主に前者であったと思われる。

(2) 博物館法の影響

政府による一連の社会改革に関連する法律は、1832年の選挙法改正法に始まり、工場法（1833年）、新救貧法（1834年）、公衆保健法（1848年）、教育法（1870年）などであるが、博物館法（1845年）の制定もその一環であった。博物館法は、1ペニーまでの入場料を徴取できることや、人口1万人以上の地域は博物館のために半ペニーの地方税を徴取できること、自治体によって永久に信託された標本をもつことなどが規定された。博物館は道徳的利益になることや、コレクションは工業デザインに寄与することを理由に議会を通過したといわれる^{註19}。それ以後、地方政府による博物館の設立と維持に関する新しい法令も制定されていった。

このことは、労働者階級の禁酒運動と結びつき、教育よりも社会改良の一環であったとされる公共図書館法（1850年）^{註20}が、図書館の入館料を無料と規定しているのとは対照的である。その理由は、博物館を労働者に無料で公開するには根強い不信感があったからである。労働者階級は酒、喧嘩、賭博などの悪行を働くことが社会問題になっていたことから、入館を無制限にして入館を許せば、展示品が毀損されることを懸念したからである。博物館法にも、そのことが考慮されて料金についての規定を設けたものである^{註21}。この問題は、19世紀末まであらゆる公的施設で議論になった。

1835年以降、ニューカッスルのハンコック博物館では、労働者が入場しやすいように夕刻の開館に踏み切ったところ、展示品は誰でも触れる状態であったにもかかわらず、一つの破損も窃取もなかったことが報告されている。また、大英博物館の自然史部長になったリチャード・オーウェンは、レスター、ノッティンガム両博物館を見学する労働者が秩序正しく、手も出さずに見学する様子に感嘆したことも伝えられている^{註22}。その後に関連する法律で無料が規定されるようになるが、この問題は当面は各館の判断にゆだねられることになった。

博物館法によって、ドーバー市博物館では、地方税を資金にして新しく博物館を建てることができた。生活に身近な事柄や自然や生物をテーマにする講演会なども定期的に行われ、1851年5月の「海の自然史」

という講演会はウィークデーの夜間に行われたように、労働者階級の人たちが参加できるように設定されていた。イプスウィッチ博物館は、博物館法制定の2年後に労働者階級に博物学を教育普及するために始められたことから、同館は無料で夜間に開館した。ドーバー市博物館と同じように、イプスウィッチでも定期的な講演会が行われ、労働者階級の人たちには無料で開放された。キュレーターのテイラーなどによって、彼らにも容易に理解をはかるために、博物学の手引書や読み物を出版するなどの啓蒙活動が行われた。

(3) 公立博物館の誕生

文化・学術団体が設立した博物館は、その後の財政難などが引き金になって運営を継続することが困難となり、自治体が博物館とともにコレクションを引き継ぐところが出てきた。カンタベリー博物館・図書館・アートギャラリーやドーバー市博物館は、博物館法が制定されて初期の段階で自治体が運営するようになった例である。イプスウィッチ博物館では公共図書館法が後ろ盾になった。その後、ブリストル市博物館は、団体が新しい博物館と図書館の複合施設を開館しながらも、キュレーターに給料を支払うことができないほどの財政難に陥り、1894年に職員と施設、コレクションをブリストル市に譲渡した。リーズ市博物館も団体は自立して運営を続けたが、1862年に新館を建てながらも、1921年に建物とコレクションがリーズ市に譲渡されて公立博物館になった。博物館が自治体に引き継がれると、多くの場合、施設の拡大や建て替えをしてインフラの整備を行っていることも特徴である。

なお、事例では取り上げなかったが、1835年にマンチェスター自然史協会が設立した博物館は世界中から博物標本が持ち込まれ、1850年にはマンチェスター地質学会のコレクションが追加されるなど充実したコレクションを有していたが、財政難に陥ったために、進化生物学者トーマス・ハクスリーの助言に従い、1867年にオーエンズ・カレッジ（マンチェスター大学）にコレクションが引き取られたように、自治体ではなくカレッジが引き継いだところもある。

公立博物館が成立した背景には、工業デザイン教育に関心をもつウィリアム・ユーアトと、禁酒と社会改良に強い関心をもつジョセフ・ブラザートンによって英国議会に博物館法が発議、提出されたことからわかるように、工業デザインの改良や社会改良をはかるという意図があった^{註23}。つまり公立博物館は、教育というよりも経済向上や労働者階級に対する社会統制を目的にするものであったといえる。

(4) コレクションの形成

1662年、王室の特許状を得て、王立協会 Royal Society が創設された。学者のほか医者や商人、貴族の

科学愛好者たちが組織したもので、アカデミーの頂上に立った。18 世紀後半になると、地方でも文化・学術的な団体が生まれて、学術研究活動が行われるようになった。産業革命を迎え、産業資本家の台頭とともに、社会における科学のあり方も変化するようになると、ワットが活躍したルナ・ソサイエティ（1760 ごろ、バーミンガム）、ドルトンが活躍したマンチェスター文学哲学協会（1781）、ランフォード、デービー、ファラデーらが所属した王立研究所 Royal Institution（1799）などのように、産業技術の課題を探求する研究組織がつくられた。地方社会が経済的に豊かになると、知識の普及や交流の場を求めた人たちが新しい文化・学術団体をつくるようになったのである。各地に博物館を設立した団体はそのような人たちによるものであり、商人、企業家、聖職者、医者などの人たちが参加していた。

博物館にはメンバーたちが各地に出かけて集めたものだけでなく、地元の人びとからもコレクションが多数寄贈された。ヨーク市博物館では最初に市長から鳥類のコレクションが寄贈された。カンタベリー博物館のように、地元出身の外交官、探検家、宣教師、軍人などが世界各地で入手したものを博物館に寄贈したところもあった。リーズ市博物館でも、メンバーたちが収集した博物学、地質学、考古学、民族誌などのコレクションが展示された。各館に配置されたキュレーターも積極的に収集活動を繰り広げた。人々からのコレクションの寄贈やキュレーターによる収集活動は、公立博物館になってからも絶えることはなかった。

ルネッサンス期に王侯貴族や富裕な人々により始まったキャビネットは、イタリアからヨーロッパ各地に広がりを見せたが、18 世紀後半にほぼ姿を消した^{註24}。リーズにもラルフ・ソーズビー（1658-1725）の「ソーズビーの珍奇品キャビネット」に当時の痕跡を見ることができる。彼は毛織物商人であったが地域の歴史研究に専念することにより、1715 年に『リーズの地誌』（Topography of Leeds）や 1724 年に『リーズの教会の歴史』（The History of the Church of Leeds）を著した。前者は、リーズの町や周辺の村々の歴史について、記録や資料にあたり実証的に書かれたものであった。彼の家でコレクションがどのように並べられたのかは不明であるが、コレクションのカタログから、現在のリーズ博物館の展示にその様子が再現されている（写真 10）。

キャビネットの終焉と文化・学術団体の博物館の誕生からみえてくるのは、コレクションは「個人が集める」ものから「共同して集める」ものに変化するとともに、特定の人々に公開するものから不特定多数の人々に公開するものへと変化したということである。個人の「博物館」から近代的な公共博物館に変化する過渡期の様子を辿ることができる。

3. 結語

18 世紀後半から 19 世紀前半の産業革命により、都市部には新興の中流階級が登場した。産業革命は一部の人々には生活の向上をもたらしたが、多数の労働者の境遇は悲惨な状態となり社会問題となっていた。当時（18 世紀末～19 世紀初頭）、保守主義であったトーリー党政府は旧来の特権階級の利益を代表する立場にあり社会改良には反対していた^{註25}。一方、産業革命によって生じた社会問題の解決に取り組む活動の一つに、都市部の中流階級の一部の人たちによって結成された文化・学術団体（ソサエティー、インスティテュートなど）の活動があった。そのような文化・学術団体に参加していたのは、商人や企業家などの資本家、技術者、医者、学者、聖職者などであった。

この時代、貧困者の救済など様々な国内問題があったが、中でも旧教徒の市民権の要求問題は長年の懸案であった（1829 年「旧教徒解放法」成立。議員の選挙権と被選挙権を獲得する）。博物館のメンバーや支援者の中にいた旧教徒の人たちにとって、博物館を運営する地域活動は政府の無策に対する無言の抗議行動であったといえるかもしれない。地域の文化・学術団体によって設立された博物館は、メンバーをはじめ協力者から寄付されてコレクションを形成し、それを公開するばかりでなく講演会などの事業を展開することを通じて、労働者にも開放することにより更生や科学的知識の普及啓発がはかられた。



写真 10 ソーズビーの珍奇品キャビネット（リーズ市博物館）
2009 年 3 月撮影

1830年代からの政府による法律改正（選挙法改正、市自治体法、救貧法、工場法など）は、新興勢力の誕生が背景となって行われたものであることから、どこまでもそれらの改正の精神はブルジョアジーの側に立ったものであったといわれる^{註26}。1845年の博物館法の制定もその一環であった。

博物館法の制定以降、博物館を設立した団体の中には財政難に陥るところが出てきた。しかし、博物館法によって自治体が財源を確保することができるようになったことから、カンタベリーやヨークでは自治体が博物館を引き継ぎ、カンタベリー博物館・図書館・アートギャラリー、ヨーク市博物館となった。文化・学術団体の中でも、イプスウィッチ博物館のように博物館法の制定後に博物館を開設したところもあるが、5年後に市の基金の援助を受けた団体に移管された。ブリストルやリーズの文化・学術団体の博物館も、市に譲渡されて市立博物館となった。

19世紀中葉になると、労働者階級の貧困を放置したままでは中流階級の生活が脅かされる、ということに危機感をもつようになり、第二の社会改革が政府で行われた。その中でも1867年の選挙制度の改正や1870年の教育法などは重要な改革であった。自由主義による労働者階級の権利や生活を保障する取り組みが行われた。

つまり、公立博物館の前史は、社会階層の違いを前提にして、中流階級が中心となって設立した博物館はメンバー同士の交流や研鑽の場であったが、コレクションを形成するにつれて、労働者階級の更生や、科学的知識などの普及啓発による、彼らの人格や生活の向上や社会の安定化をはかるようになった、というものであった。その後に博物館を引き継いだ自治体は、博物館法など法律により財源を確保しながら施設や職員など内部体制を整えて博物館を維持発展させていった。本来ならば、産業革命後の工業化社会に新しい知識を得るために学習の場として博物館があるべきであったといえる。博物館が内包する歴史的な意味合いの一端を垣間見ることができよう。

註1 矢島國雄 1990「英国博物館史 その1：1920年までのコレクション・コレクター・博物館」明治大学学芸員養成課程紀要1, pp.33-56

註2 矢島國雄 1992「英国博物館史：その2」明治大学学芸員養成課程紀要3, p.26

註3 註2 p.26, p.28

註4 <https://www.thermh.org.au/about/about-rmh/our-history/historical-figures-our-past-eccentric-surgeon-james-beaney> (2020年12月15日閲覧)

註5 <https://www.dovermuseum.co.uk/Information-Resources/Information-Resources.aspx> (2020年12月17日閲覧)

註6 S.J. Plunkett, 'Ipswich Museum Moralities in the 1840s and 1850s', in C. Harper-Bill, C. Rawcliffe and R.G. Wilson (eds), *East Anglia's History. Studies in Honour of Norman Scarfe* (Boydell Press, Ipswich/Centre of East Anglian Studies, Norwich 2002

註7 https://en.wikisource.org/wiki/1911_Encyclop%C3%A6dia_Britannica/Henslow,_John_Stevens (2020年12月5日閲覧)

註8 https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary_of_National_Biography_1885-1900/Taylor,_John_Ellor (2020年12月7日閲覧)

註9 S.J. Plunkett, 'Municipal reform and civil progress in 19th century Ipswich', in R. Malster and N. Salmon (eds), *Ipswich from the First to the Third Millennium: Papers from an Ipswich Society Symposium* (The Ipswich Society, 2001), pp. 35-66, at pp. 60-64.

註10 リン・バーバー（高山宏訳）1995『博物学の黄金時代』国書刊行会, pp.409-410

註11 註10 pp.408-409

註12 展示解説文より（2009年2月27日調査）

註13 <https://www.leedsphilandlit.org.uk/about-the-society/#the-leeds-city-museum> (2021年1月5日閲覧)

註14 註1 p.47

註15 吉田恵子 1983「19世紀末イギリスにおける貧困についての一考察」明治大学社会科学研究所年報23, p.189

註16 山本通 2016「イギリス産業革命期の「規律と宗教」経済貿易研究(42), p.25, p.29

註17 註15 pp.190-191

註18 註15 pp.194-195

註19 註1 p.42

註20 T. ケリー、E. ケリー（原田勝、常盤繁訳）1983『イギリスの公共図書館』東京大学出版会, p.71

註21 註1 p.42

註22 註10 pp.237-238

註23 註20 pp.74-77

註24 小宮正安 2007『愉悅の蒐集—ヴァンダーカンマの謎』集英社

註25 今井登志喜 1953『英国社会史』（下）東京大学出版会, p.25

註26 註25 p.68